

Society5.0 に向けた教育の在り方とは



田中 義恭

平成 10 年入省
初等中等教育局
初等中等教育企画課教育制度
改革室長

「柴山・学びの革新プラン」のとりまとめを担当。初等中等教育に関し戦略的な対応を要する事項の調整、義務教育の機会を保障するための施策の推進などを担当している。



小川 哲史

平成 14 年入省
総合教育政策局政策課
課長補佐

Society 5.0 に向けた人材育成に関する省内タスクフォースを担当。2018 年新たに発足した総合教育政策局で、局全体のマネジメントを担っている。



佐藤 有正

平成 17 年入省
初等中等教育局
情報教育・外国語教育課
課長補佐

初等中等教育における教育の情報化や外国語教育の推進を担当。2018 年 3 月まで秋田県教育委員会に出向し、義務教育や高等学校教育を担当。



横田 洋和

平成 23 年入省
大臣官房政策課
専門官(併)企画係長

Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会を担当。省内の総合調整窓口として教育・科学技術・スポーツ・文化にまたがる施策の検討も担当。

私たちは、IoT、ロボティクス、人工知能(AI)、ビッグデータ等の先端技術を活用することによって、新たな価値を創出し、地域、年齢、性別、言語等による格差なく、多様なニーズ、潜在的なニーズにきめ細かに対応したモノやサービスを提供することのできる新たな時代、「Society 5.0」を迎えようとしています。非連続的な変化が予想される時代において活躍する人材を育てるために教育はどうあるべきか、文部科学省はどう取り組んでいるのかについて、関係する職員が思いを語りました。

横田：自己紹介も兼ねて、Society5.0 への関わりを教えてください！

田中：去年(2018年)の1月までは官房政策課で Society5.0 に向けた人材育成の大臣懇談会を

立ち上げ、詳細は後ほど説明しますが、今の部署では、「柴山・学びの革新プラン」のとりまとめを担当しました。

小川：その大臣懇談会と省内職員によるタスク

フォースの2つの会議が去年(2018年)6月に「Society 5.0 に向けた人材育成」の報告書をまとめており、私は後者の会議の担当として教育部分の取りまとめを行いました。

佐藤：教育の情報化全般を担当しています。これまでの教育実践の良さに ICT や先端技術を効果的に取り入れて、学校現場の方々を支えられるようにしていくことが大切だと考えています。

横田：ありがとうございます。先ほど小川補佐から報告書についてお話がありましたが、そこでは、現実世界を理解し意味付けできる等の「人間の強み」を発揮し、AI等を使いこなしていくために、①文章や情報を正確に読み解き対話する力、②科学的に思考・吟味し活用する力、③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力が共通して求められることを指摘しました。そして、一斉一律授業のみならず個人の進度や能力等に応じた学びの場や、同一学年集団の学習に加えて異年齢・異学年集団での協働学習の拡大など、「学

びの在り方の変革」を打ち出しています。タスクフォースには、どのような職員が参加されたのですか？

小川：構成員は省内の課長級職員ですが、企画官や、課長補佐が報告書の原案を執筆したんですよ。鈴木大臣補佐官(当時)や林大臣(当時)と、今後の学校や教育の在り方をフラットに議論を重ねて作り上げました。

横田：有識者や現場の方からはどのような反応がありましたか。

佐藤：社会が大きく変化していく中で教育や学びも変えていかなければと、前向きに受け止めていただいた方が多かったと思います。政策の方向性やビジョンを示すことによって、各学校や教育委員会でも議論が加速していると感じます。

田中：今回、大臣懇談会では、ふだんこうした議論ではあまりお話を伺えない AI のトップレベルの研究者、先端医療を実践している医者、メディアアーティスト、経済学者、労働法制の専門家な



どの、トップレベルの方々と、来るべき社会像、求められる人材育成を根本的な所から議論したことが、非常に有意義な報告書に繋がったと思います。

小川：私も学校関係者から、教育の大きな未来像を描き、仕事をしていく上で希望を持てるもので、非常に良かったという声をいただきました。

横田：昨年秋に柴山大臣の下でも、「新時代の学びを支える先端技術のフル活用に向けて ～柴山・学びの革新プラン～」が発表されましたが、こちらはどのような内容でしょうか。

田中：先ほどの報告書と連続したもので、学校教育での先端技術の活用方策の具体化に向けたキックオフという位置付けです。①遠隔教育の推進による先進的な教育の全国での実現、②先端技術の導入による教師の授業支援、③先端技術活用のための環境整備、の3つが柱です。

忘れてはならないのは、Society5.0 の時代からこそ、学校は、単に知識を伝える場ではなく、人と人との関わり合いの中で、人生や社会を見据え



て学ぶ場となることが求められるということです。先端技術を活用して学びの質を高める上では、人間である教師の役割が重要であり、教師が AI に置き換えられるということではありません。また、全国に広める上では、導入費用を低く抑えることも含めて、先端技術が格差を拡大しないように配慮する必要があります。むしろ、過疎・中山間といった地理的な課題や、障害や外国籍の子供たちの課題を、先端技術の力を活かして乗り越える必要があります。

佐藤：去年（2018年）9月に策定した「遠隔教育の推進に向けた施策方針」でも、遠隔教育は、学校現場や子供たちのニーズに応じて、学びの質を高めたり、学習機会を確保したりする上で可能性を持つものとしています。遠隔教育を含め、これからの学びの基盤となる学校の ICT 環境整備は喫緊の課題です。

横田：こういった施策によって、学校、ひいては日本社会はどう変わっていくのでしょうか。

田中：地理的・社会的な要因により厳しい環境にある子供、特定の分野で優れた能力を持つ子供のニーズに、遠隔教育を含めた先端技術を活用することで一層対応することが可能になります。それによって Society5.0 時代に必要な能力の育成を、全国どこでも、どんな人にも分け隔てなく実現できる可能性が高まります。

佐藤：教育が社会を変える、社会の変化を受けて教育を変える、どちらも大切です。子供たちに

は、変化を前向きに受け止め、主体的に関わってよりよい社会を創ってほしい。そして豊かな人生を送ってほしい。その上で、教育や学びは欠かせないと考えます。

横田：最後に、志望者へのメッセージをお願いします！

田中：Society5.0 においても、人材育成の重要性は消えない。むしろ社会が高度化、複雑化すると、学びの重要性というのはますます高まってくると思います。このため我々としては、社会の急激な変化を先取りして政策を考える必要がありますが、その時に教育現場の実態と離れたものになってはいけないわけですね。目の前の課題をしっかりと見据えながら、実効性のある政策を将来を見据えて作っていく。言うは易し行うは難しなんですけれども、非常にやりがいのある仕事ですから、是非高い志と熱い心を持った若い皆さんと一緒に仕事ができればいいなと思っています。

小川：急激な社会の変化に対応して色んな政策の必要性が高まっているわけですが、教育というのはまさに社会を支える「人」を作る分野ですので、社会の変化への対応を真っ先にやらなきゃいけない分野だと思います。そういう意味で、これから教育行政を担っていく人にとっては、非常にやりがいのある職場だと思います。

佐藤：頑張っている方々の役に立つために、社会に貢献するために、自分の持つ力を発揮するという「働くこと」の根源を味わえる仕事だと思いま

す。教育も当然大切な分野ですが、科学技術・学術、スポーツ、文化の分野での政策を通じて、これからの我が国や社会の発展に貢献していくことに、何か心ひかれる思いがあるのであれば、文部科学省は、自分なりの働き方、働きがいを築き上げていくのに魅力的な職場だと思います。

横田：教育のことだけではなく、社会の変化に幅広いアンテナを張って、未来志向で関係者と一緒になって政策を作り、そして実行していく。千差万別の意見があるだけに調整は難しいですが、国として大きな方向性をまとめ、政策に結実させた時の達成感は何物にも替え難いと思います。是非、人の力を通じて一緒に未来を切り拓いていきましょう！

—お話を伺って、これからの日本社会を支える人材育成の根幹を担う「未来省」の仕事の醍醐味を感じました。本日はありがとうございました。

こぼれ話集

こぼれ話①

Society 5.0 の仕事に関わって最も驚いたことは何ですか？



田中：検討初期の段階に「Society 5.0 とは何か」という省内部の担当職員同志の勉強会を実施する中で、Society 5.0 に詳しいある上司が「Society 5.0 は、それぞれの心の中にある」という名言！？を発したことです。思わず笑ってしまいました、未来社会を正確に予測することはできず、むしろ「こういう未来を実現したい」という意志が大事、ということだと納得しました。

小川：大臣はじめ文部科学省の幹部の方々が、未来の教育の姿をとっても自由に議論をしていたことです。自分ももっと現実にとらわれすぎず、柔軟に物事を考えなければいけないと痛感しました。

佐藤：AI についていろいろとお話を伺う中で様々な可能性に驚かされるのですが、それ以上に、人間の不思議さや神秘に気付かされることが多いことに最も驚きました。ICT を担当して、これほ

ど、地球誕生以来の生命の歴史に思いを馳せることが多くなるとは考えていませんでした。

横田：「現在の米国にある職の約 47% が、2030 年までに自動化の影響を受ける可能性が高い」という、マイケル・A・オズボーン氏（オックスフォード大学准教授）らの試算です。AI か人間かという二項対立ではなく、むしろ AI を活用してこれからの社会を生き抜く人材をどう育成するかという観点で考えたのですが、その議論を喚起する良いエビデンスとなりました。

こぼれ話②

Society 5.0 の仕事をしていて役得だと思ったことを教えてください

田中：Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会において、有識者である脳神経外科の医師の方から、どういことをすれば子供の脳発達に良いか、という最新の科学的知見に関するお話を聞くことができたことです。報告書にどう反映させるかということも考えつつ、自分の子育てへ

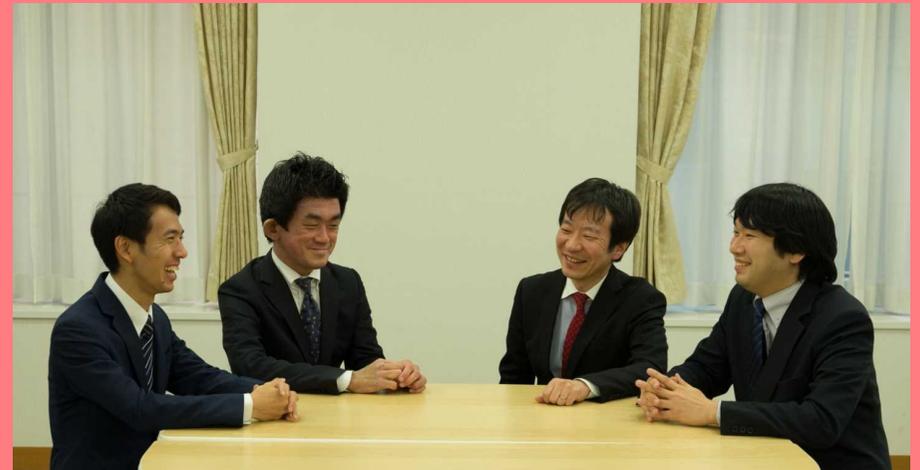


の応用方法をも思わず考えてしまいました。

小川：様々な分野で社会の最先端を走る方々のお話を直接お伺いすることができた点ですね。とても刺激的な話ばかりでした。その後、議論を報告書にまとめるのは大変でしたが・・・。

佐藤：Society 5.0 は我が国が目指すべき未来社会の姿ですので、この仕事をしていると幸せなことに、様々な分野の方々のお話を伺う機会を得られ、素敵な人や考え方、事実に出会えることが多くあります。素敵な出会いにわくわく胸をときめかせつつ、様々な人や考え方、事実を受け止め、自分自身の成長の糧にしたいと思っています。

横田：教育関係者に限らず様々な方々とお話をする時に、この Society 5.0 の話題を出すと、ふだんは文部科学省の政策にあまり興味を持たれない方とも、ビジョンについて共感していただけたり、政策について活発な議論ができることです。



行政官として政策の重要性を発信することの重要性を再認識しました。